

〔古史傳神代三十一〕福慈岳は即富士山なり。略中中さて古く此山の奇靈なる由を稱たるは、萬葉三卷

山部赤人望不盡山歌に、天地の分し時ゆ、神佐備て高く貴き、駿河なる布士の高嶺を、天原振放  
見れば、度日の陰も隠るひ、照月の光も見えず、白雲も伊去は、かり、時自久ぞ、雪は落ける、語つ  
ぎ、言繼ゆかむ、不盡の高嶺は、略中中此山を詠る歌、是らより古きは有事なし、然れど天地の分し

時ゆ、神さびてと云る如く、神世より立たる事は云も更なり、和漢合運圖など、舊き年代記の類、

起などに、孝安天皇九十二年六月、富士山涌出と云、或は孝靈天皇の五年に、近江國に水海湛、駿河國に富士涌出と云る説も有と、舊き俗説にて取に足す、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年五月五日甲寅、駿河國言富士山上五色雲見、

〔帝王編年記清和十四〕貞觀十七年十一月五日、駿河國吏民似舊致祭、日加午天甚美清、仰觀富士峯、有白

衣美女二人、雙舞山巔上、去山巔一尺餘云々、

〔本朝文粹十二〕富士山記

都良香

富士山者在駿河國峯如削成、直聳屬天、其高不可測、歷覽史籍所記、未有高於此山者也、其聳峯鬱起  
見在天際、臨瞰海中、觀其靈基、所盤連亘數千里間、行旅之人、經歷數日、乃過其下、去之顧望、猶在山下、  
蓋神仙之所遊萃也、承和年中、從山峯落來珠玉、玉有小孔、蓋是仙簾之貫珠也、又貞觀十七年十一月  
五日、吏民仍舊致祭、日加午天甚美清、仰觀山峯、有白衣美女二人、雙舞山巔上、去巔一尺餘、土人共見、  
古老傳云、山名富士、取郡名也、山有神名、淺間大神、此山高極、雲表不知幾丈、頂上有平地、廣一許里、其  
頂中央窪下、體如炊甑、甑底有神池、池中有大石、石體驚奇、宛如蹲虎、亦其甑中、常有氣蒸出、其色純青、  
窺其甑底、如湯沸騰、其在遠望者、常見煙火、亦其頂上、匝池生竹、青紺柔懷、宿雪春夏不消、山腰以下生  
小松、腹以上無復生木、白沙成山、其攀登者、止腹下、不得達上、以白沙流下也、相傳昔有役居士、得登其  
頂、後攀登者、皆點額於腹下、有大泉出自腹下、遂成大河、其流寒暑水旱、無有盈縮、山東脚下有小山、土  
俗謂之新山、本平地也、延曆廿一年三月、雲霧晦冥、十日而後成山、蓋神造也、